郷土史への扉

天降川の姿

天降川川筋直し三五〇年記念

その❷

今年は、国分平野を斜めに分断するように流れていた天降川が寛文六（一六六六）年、現在のような川筋に変わって三五〇年を迎えます。前回は旧天降川の様子を紹介しましたが、今回は川筋直しに至った背景について紹介します。

暴れ川「天降川」

天降川の流れる国分平野は、縄文時代早期（約六千年前）の温暖化に伴う海面上昇によってできた※1沖積平野です。平野奥部までの標高の高低差はほとんどなく、河川の流れは非常に緩やかになっています。

そのため普段は穏やかな流れですが、多量の雨が降ると増水、氾濫を起こし人々を苦しめてきました。

暴れ川を示すエピソードとしてあるのが、天降川河口付近の国分湊地区に鎮座する「長野神社」。当初、国分清水の牟田の河川付近にありましたが、鎌倉時代の建長年間（一二四九～一二五五）に起きた河川の氾濫によって、湊の地まで流され現在に至っている、という伝承が残っています。

薩摩藩の事情

天降川の川筋直しの背景には、当時薩摩藩が抱えていた実情にも深い関係があります。

薩摩藩の石高は七十七万石といわれ加賀藩百二万石に次ぐ第二の※2大藩でしたが、江戸時代当初から慢性的な財政赤字に苦しんでいました。その要因は次のとおりです。

①武士の割合がおよそ25％と多い。他藩は5％ほど。

②石高の七十七万石は籾高であり、玄米高では三十六万石程度であった。他藩は玄米高。

③幕府が実施する事業の負担金は一万石当たりとなっており、薩摩藩は七十七万石分であった。

④参勤交代で多額の資金を要した。

⑤藩内は火山灰（シラス）に広く覆われ痩せた土壌が多く、作物に適した土地が少なかった。

⑥台風や火山噴火などの自然災害が多く、特に霧島や桜島の噴火によって多大な被害があった。

このような苦しい財政状況の中、川筋直しによって約四百町歩の水田ができ、新たに五千石の米が採れるようになったことは、薩摩藩にとっては非常に重要なことであったと思われます。

一石三鳥の治水工事

天降川の川筋直しの主な理由としては、増水のたびに起こる河川の氾濫を防ぐための治水工事であるとともに、新たに水田を作るための新田開発でした。

河川をあえて微高地である国分広瀬の大野原と、隼人町の真孝原の間に通すことは、一見、難工事でコストもかさむ計画と思われますが、一旦水路を通すと、微高地全体が堤防の役割を果たすため、河川が決壊するような被害は起きません。また、手籠川と天降川の合流地点から錦江湾までの河川を直線状にすることで、増水しても抵抗も小さく流れやすい河川、すなわち災害が起きにくい河川に造り変えました。川筋直しによって災害がなくなった旧河川敷は、穀倉地帯へと生まれ変わり、薩摩藩や地域の人々に恩恵をもたらしました。

また、当時の天降川は国分平野を斜めに分断するように流れており、船荷を運ぶ水運として利用していました。反面、両岸が大きく隔たっていたため、橋を架ける場所も少なく、人々の行き来や物流の流れ、つまり経済活動を阻害していました。

このように、天降川の川筋直しは、防災・治水、水田開発、経済活動の振興を目的とした、一石三鳥の治水工事であったと思われます。

次回は川筋直しと山ケ野金山の関係について紹介します。

（文責＝鈴）

※1 土砂が積もってできた平野。※2 石高が多い藩。